しなやかに逞しく

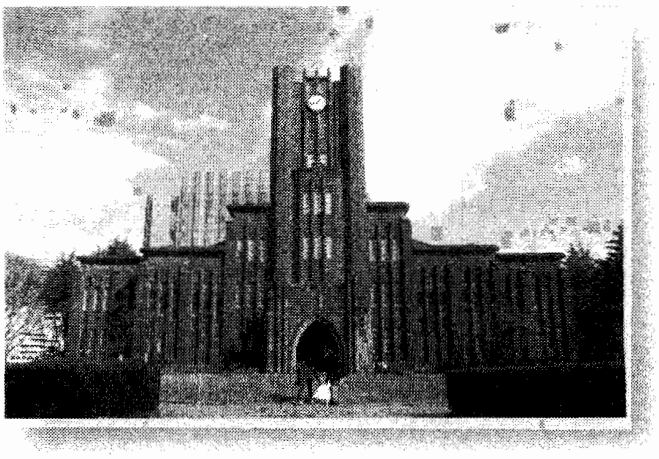
東京大学 理学系研究科長・理学部長　山形俊男

エドウイン・O・ライシャワー博士の名前を知る人はもう少ないかもしれない。博士はハーバード大学で東洋史学の教鞭をとっていたが，ケネディ大統領の命を受けて1961年から1966年まで駐日大使を務め，日米間の幅広いパートナーシップの基礎を築いた方である。氏は円仁（慈覚大師）の旅行記『入唐求法巡礼行記』の研究で博士号を取得した。円仁は838年に遣唐使として大陸に渡ったが，仏教排斥の嵐の中にあっても自らを失わず，国際性をもって逞しく生き抜き，帰国して日本文化に大きな貢献をしたことで知られている。

ライシャワー博士は米国に帰任するにあたって，円仁の生地，下野の壬生を訪問したが，このときに近隣にある私の出身高校にも立ち寄った。私たちは興味津々で講堂の壇上の博士，ハル夫人，同時通訳の西山千早稲田大学教授を眺めていたが，博士は急に「今日はいつもと逆でゆこう。円仁について私は日本語で話す。しかし，生徒さんは英語を勉強したいだろうから，西山さん，私の日本語を英語にしてほしい」というのである。

講演の詳細は忘れてしまったが，ライシャワー博士の茶目っ気，他者への思いやり，その根幹にある自由闊達さ，傍らで微笑むハル夫人，この一瞬に受けた感動は今も昨日の出来事のように思い出す。日本文化の豊かさの基を逞しく築いた円仁と同じ自由闊達の精神が，ライシャワー博士には生き生きと息づいていたのだ。このことを私が知ったのは，実に『入唐求法巡礼行記』についての博士の著作を読んだ数十年後のことであった。

東京大学の理学系研究科・理学部には毎年，国内外から多くの学生が参集し，ほぼ同数の学生が学士，修士，博士の学位を取得して，さまざまな分野に巣立ってゆく。日夜勉学に励む学生数は二千名を超える大集団である。学内においては〈自然の仕組みと理を知る〉という，人類の進化を促してきたもっとも根源的な営みに従事していても，経済構造の変化，価値観の多様化など社会の荒波から逃れることはできない。むしろ，複雑化する現代社会において根源的な営みに従事するがゆえに，さまざまな懊悩を抱えることにもなる。

そこで学生が心豊かな学生生活を送り，逞しくもしなやかな精神をもって生き生きと社会で活躍してゆくように，早い段階で悩みを聞き，関係者とともに適切に助言する活動を続けてきた。この部局内学生支援室の広範かつきめ細かな活動は学内だけでなく，国内においてもユニークなものと聞く。多くの実践例が蓄積した今，これをとり纏め，体系化して出版しておくのは，今後の学生支援の有り様を考える上で貴重なのではないかと考えた。

ますます混迷する時代にあっても，未来社会を担う若人はしなやかな精神をもって，逞しく巣立っていってほしい。国際性をもって，豊かな文化の形成に貢献してほしい。そして，なによりも丁寧な人生を送ってほしい。そんな願いを込めて積み重ねてきたさまざまな試みを後世に伝えることも本書の重要な役割であると思っている。